

## 愛知県の知多半島における外来カメ類の増加

矢部 隆（愛知学泉大・現代マネジメント）

田村ユカ（名大・院・環境学）

高橋洋生（自然研）

### 【調査地と調査方法】

知多半島は名古屋市から南方に 35km 延びており、標高 130m 未満の丘陵地である。大きな河川や湖沼が無く、しばしば水不足に陥っていたため、おもに江戸時代以降 1013 面の農業用ため池が造成されてきた。1961 年からは水生生物の移動経路ともなり得る愛知用水が供用されており、木曾川から取水された水が半島の先端まで届けられている。半島の 10 市町に 63 万人が住んでおり、人口は半島の先端よりも基部ほど多い。半島の先まで自動車専用道路が通っているし、一般道もよく整備されていて交通は便利である。

この半島の基部の 10 面、中央部の 9 面、先端部の 12 面、先端部に位置するが当初からカメ相が特異であった隣接する 4 池の、計 35 面のため池においてかご罟でカメを採集した。かご罟は 2005 年 10 月に 4 日間、2011 年には 7 月と 9 月に計 8 日間、2018 年 9 月に 4 日間仕掛けた。採集したカメのうち、北アメリカ原産の外来種ミシシippアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*、以下アカ) と異種間交雑の個体は野外に戻さず、その他のカメは個体識別のマーキングをして放逐した。

### 【結果と考察】

知多半島では 2005 年、2011 年、2018 年にそれぞれ 493 頭、707 頭、639 頭のカメを採集した (表)。採集できたカメは日本列島の固有種であるニホンイシガメ (*Mauremys japonica*、以下イシ)、クサガメ (*Mauremys reeresii*、以下クサ)、アカ、イシとクサの交雑個体 (以下交雑) であった。またニホンスッポン (*Pelodiscus sinensis*、以下スポ) が、2018 年に初めて基部の 1 つの池で 3 頭採集された。

表。カメの採集個体数と、アカの割合。()内がアカの%。

	基部	中央部	先端部	特異な4池	個体数の計
2005年	249 (72.7%)	83 (9.64%)	63 (3.17%)	98 (56.1%)	493
2011年	252 (72.2%)	108 (24.1%)	267 (10.5%)	80 (38.8%)	707
2018年	370 (76.5%)	77 (42.9%)	174 (46.6%)	18 (33.3%)	639

知多半島の基部では、アカの割合は2005年、2011年、2018年にそれぞれ採集個体数の72.7%、72.2%、76.5%であり、高い比率での優占が続いていた。基部には人口が多いし、大都市名古屋から自動車ですぐに持ち込めるので、早い時期から多数のアカが野外放逐され、野外繁殖を始めていたと考えられる。一方中央部では9.64%、24.1%、42.9%と徐々に増加しており、2018年には割合がそれまで優占種であったイシと等しくなった。先端部では2005年、2011年にはアカはそれぞれ3.17%、10.5%と低い割合であったが、2018年には46.6%と上昇し、47.1%のイシとほぼ等しくなった。アカが採集できた池は2005年には16面であったが、2011年には24面、2018年には26面で、増加していた。アカの増加にともなってイシは減少していた。

遺伝子の多様性の研究から、日本列島のクサは朝鮮半島や中国から移入された外来種であるという説が近年流布している。しかしクサの生物地理学的な研究はまったく不十分で、現段階で日本列島のクサガメが外来種であると結論することはできない。ただし様々な情報から、知多半島にはもともとクサは自然分布していなかったようで、この半島にとってはクサは外来種である可能性が高い。クサの採集個体数は少数ではあったが、基部の7面、中央部の6面、先端部の4面、計17面と半数近いため池で見つかった。

またイシとクサの交雑個体も半島の先端から付け根までの13面の池で採集された。そのうちの4面の池は、クサが確認されていないにもかかわらず、交雑が採集されている。知多半島では外来種問題としてのクサの分布拡散や野外繁殖と、クサによるイシに対する遺伝子汚染の進行が懸念される。